

弘前大農学生命科学部付属白神自然環境研究センター

最前線 研究室の挑戦

世界遺産の価値向上へ

◆弘前大農学生命科学部付属白神自然環境研究センター 教員3人が所属。世界自然遺産白神山地を中心に、動物や植物の生態学的研究や気象の研究などを行う。地球温暖化といった環境変化などについても研究し、環境教育の推進を目指す。

弘前大農学生命科学部付属白神自然環境研究センターの相馬純助教(30)はカメムシを専門に昆虫の分類学を研究している。新種の発見や生態の解明を通して、世界自然遺産の価値向上と固有種の保全を目指す。

昆虫の分類学、固有種の保全にも貢献



顕微鏡でグンバイムシの標本を見る相馬純助教。9月下旬、弘前大



小笠原諸島固有種のハジマングンバイ発見の瞬間
(久末遊氏撮影、相馬純助教提供)

を与える珍しい種が存在。識に採択された、昆虫の保全と別が難しい種や名前がついて生態の解明を目的とする世界自然遺産・小笠原諸島の研究プロジェクトチームに参加する。そこでまた調べられている。世界遺産登録に当たっては、陸員や植物の研究が評価される一方、昆虫は有名な固有種が生息するにもかかわらず、これまでに新種を含めて102種いると明らかにした。世界遺産は登録後も審査がある。諸島の昆虫の研究を進めることで「遺産の新たな価値として認められるのではなか」と意義を話す。

最近捕食性の外来種の影響を受けるカメムシについても調査しており、被害を受けている場所や環境を知ること、固有種の保全も目指す。「今回はかなり基礎的な調査から始めなければならなかったが、最終的には遺産の価値を上げることにも、固有種の保全にも両方貢献していきたい」と展望を語る。

(木下桃子)

「はいか」と固有種の進化の手掛かりになるとみている。「遺産の価値を上げるには、固有の昆虫が進化してきた背景を明らかにすることが重要」と強調する。